

なんて駄目な幻想郷

parui

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

こんな幻想郷は嫌だ。そんな幻想郷。

目次

十六夜咲夜は駄目なようです	1
八雲紫は駄目なようです	6
霊烏路空は駄目なようです	11

十六夜咲夜は駄目なようです

「ふひひ。お嬢様のパンツ。♪」

私、十六夜咲夜はレミリアお嬢様が寝ている隙に、

お嬢様のパンツをこっそりと拝借してきた。

私はお嬢様が大好きだ。

愛してる。なんだってできる。

排泄物だって、いや、自重しておこう。

取り敢えず私はお嬢様が大好きなのだ。

愛を抑えきれずにこんなことをしているが、私は変態ではない。

断じて違う。

さて、このパンツ。どうするか。

フフフ、凡人はそのまま舐めるだろう。

しかし、私は違う。

私はもう一過程いれる。

それはレモンティーを垂らすことだ。

レモン・ティーを垂らすことによって、

お嬢様の膀胱にあるあれが朝、パンツについてしまっている状態を作れる。

お嬢様はその状態にならないので擬似的に作り出しているのだ。

この過程によりこのパンツがより完璧になっていく。

「さて、ペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロ」

レモン・ティーを垂らしたパンツを舐める。

美味しい。

いや待てよ。

これでいいのか十六夜咲夜。

いいや、まだだ。まだ終わらんよ。

私は頭をフル稼働する。

やるんだ十六夜咲夜。

これはレモン・ティーではなくあれなのだ。

想像で変えるのだ。

人は自分の主観の中ならどんなことだってできる。

やれ。やるんだ。

うおおおおおおおおおおおおおおおおお！

よし、いける！いけー

「しゃくやーどこにいるのー」

「あー」

お嬢様が部屋に入る。まだ見られてはいない。

マズイ。この状況、非常にマズイ。

考えろ。考えるんだ十六夜咲夜。

どうにかする方法を。

そうだ。時を止めればいい。

「この間0.3秒のことである」

急いで懐中時計を探さなー。

「咲夜、何をしているの？」

「いや、あのその、ふへへへへ」

見つかった。

どうしよう。言い逃れできる言い訳が思い付かない。

考えろ考えるんー。

「何をしているのかと聞いているのよ？」

かなり怒ってるようだ。

いや、もう怒ってるの範疇を越えてるかもしれない。

自分のパンツが横にレモンティーを置いた従者に舐められているのだ。

状況は察することができし、怒りは相当なものだろう。

「す、すみませんでしたあ！」

取り敢えず謝ろう。謝って謝って許してもらえるように頑張ろう。

どうにかなってほしい。

ならないと困る。

「許すと思う？」

「お、思います。」

「ならあなたはとんだバカね」

「す、すみません」

「どんな罰を与えようかしら」

クビだけは免れたようだ。

どんな罰でも私は耐えられる。もう大丈夫。

「そうね。あなたこれから1ヶ月間私から半径5m以内に入らないで頂戴」

「え？」

1ヶ月。

それは日にして31日。

時にして744時間。

分にして44640分。

秒にして2678400秒。

とてもとても長い時間だ。

それは私にとって死刑宣告より悲しく。怖いものだった。

お嬢様は私に死ねと言うのか。

「そんな！それだけはやめてください！」

「これは決定事項よ」

「あうあ」

翌日、レミリアに襲いかかってギツタギタにされ、

さらに次の日には、首を吊っているのが見つかった。

しかし、吊ったばかりだったらしく、生きており、仕方がなしに許されたそうなの。

八雲紫は駄目なようです

「いやあ、眼福眼福♪」

「なにスギマを見ながらニヤニヤしてるんですか紫様」

「なーんでもいーじやなあーい♪」

「うわあ、ちよつと気持ち悪いですよ」

「アイエエエエエ？気持ち悪い？気持ち悪いナンデ？」

「そんな緩い顔で言われても」

「フフフ」

私の目には何が見えているのかって？

それはね。

霊夢のパンツよ。

(しかも現在進行形で履いてる)

因みに白いパンツ。

この年頃で白いパンツっておぼこいわよねえ。やっぱり世間に無関心って駄目だわ。

またそれについて言わないとね。

このままで死ぬまで結婚しなさそうなのが霊夢の将来で唯一怖いところよねえ。

あら、ごめんなさい。話がそれちゃったわね。

え？なんでこつちと話せてるのかつて？

私の能力をすればあなたたち傍観者との境界をいじくることだってできるのよ？

妙に納得したような顔をするわね。

まあ、いいわ。

話を戻すけど私は今、弾幕勝負中の霊夢のパンツを見てるの。

だつて霊夢つて可愛いじゃない？

可愛くて愛くるしくてキュートでプリティーで。

もう世界一の美少女よ。

因みに私は霊夢が大好きだけど霊夢に私は嫌われてるみたいね。

この前行つたら露骨に嫌な顔されたし。

ちよこちよこパンツを拝借してるだけなのにねえ。

洗つたとはいえ一度でも霊夢が履いたパンツは私にとっては限りなく価値あるもの

だから

何度か拝借してるのよねー。

あ、ちゃんと返してるわよ？

え、そのせいだろうって？知ってるわよそんなこと。

知ってる上でそれくらいいいじゃないと思うのよ。

で、履いてたのでそれだから今履いてるのなんか眼福眼福ってなるのよ。

バレるんじゃないかと思った？残念、スキマはスカートの中にあるわ。

だから突風によるパンチラがない限りは大丈夫よ。

「キヤツ！」

「あれ？」

「何よ？」

「今、スカートの中にスキマがあった気がしたぜ」

「は？」

「あつち向いてるから見ろよ」

「ありがと ホントかしら」

本当だった。

あんのクソBB A。

ダンスの中のじゃ飽きたらず私のスカートの中を見てたのね。
今は見られてないよね。考え事でもしてるのかしら。
よし。

「えいっ！」

「痛いっ!？」

なんだ!? 今、何か物凄い痛みが走ったわよ!?

周りには何もなし誰もいない。

もしかすると。

スキマを見ると。

直ぐに私の顔が青ざめる。

何故ならスキマの向こうにパンツと怒った霊夢の顔が見えたから。

「許して霊——」

「許すかあ!」

霊夢がお祓い棒で私の額を思い切り突く。

鋭い痛みが走り、意識が遠のく。

嗚呼、もっとタイミングを考えれば良かった。

そのあと藍に起こされ、霊夢に謝罪したが、
帰ったあと、藍に反省はしているが後悔はしていないと語ったそうなの。

霊鳥路空は駄目なようです

「ざとり様〜」

「何？お空」

「あのねー、トあつ」

「あ、躓いた。」

「あ、あ、うわわわわ〜！」

え、ちよ、なんで態勢を戻そうとしながらこつち来るのお空？

ちよ、近い近い転けそうじゃない。やばいやばいやばー。

「いたたたた。大丈夫ですかさとり様」

「だ、大丈夫よ。つて、きゃああああああああああああ！」

パンツとスカートが脱げてる!?

何で!?何があつたの!?!どうしてこうなった!?!

「あわわわわわわわわ」

お空がどうしようかと慌てふためいてる。

右往左往して、壁にぶつかる。

ぶつかつたりすると必ず相手を物凄い状態にする謎の力!
 いやでもあれはフィクションだし、いや、有り得るかも。

なんか地上のどつかの巫女が、

幻想郷では常識にとらわれてはいけない。

的な事を言ったという話を聞いた気がする。

もしそれが本当ならこれは十分有り得る仮説よね。

もしそうなら、お空、恐ろしい子!

「お燐く」

「どうしたのよお空」

「さとり様に悪いことしちゃったあー」

「は？」

〜少女説明中〜

「アハハ、あんた凄いわね」

「え？何が？」

「いや、ごっつちの話よ」

お空ヤバいわね。

多分さとり様なら今頃、

お空・恐ろしい子！

とか考えてるんだろうな。

私も被害に合わないようにはしないとねえ。

「じゃ、私は用事があるから行くわね」

「待つてよ〜にやつ！」

「えーつて、え？」

お空が倒れて来る。

いや、大丈夫だ。これだけ距離があれば――

ビリッ

え？

「お隣ごめん」

服の下の方を倒れる時掴まれて破れただど！?

お空・恐ろしい子！

それから数日間お空のそばに二人は行かなかったそうなの。